
私は語るべきを持たない

天野 雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私は語るべきを持たない

【Nコード】

N6157C

【作者名】

天野 雀

【あらすじ】

私は語るべきを持たない。ただ、私は自らに自問する。私は私に自問する。ただ、意味するところを自問する。

私は自らが生きているのかを自問する。

果たして、私は生きているのだろうか？

その問いはまず、人間の生を定義しなくてはならない。
だが、果たしてそうなのだろうか？

自分が生きているかどうかなど、自分自身のことなのだから、自分自身が一番、他の誰よりも明確に、理解できそうなものだ。

その他でもない私が自問する。

私は果たして生きているのだろうか？

その答えはこの暗闇の中にはない。

私は私の体を起こした。

目を開けたその先にも、満足な答えなどありはしない。

中流階級をしめすような質素なベッドも、最近めつきりやらなくなつたPSS2も、高校生の男子らしいといえばらしい掃除の行き届いていない私室も。窓からさしこむ初夏の陽射しも、小鳥のさえずりも。

なにひとつ私に満足な答えなど与えてはくれない。

私は生理的にあくびをひとつベッドの上のこし、

ひさびさの清清しい目覚めに満足して部屋を後にする。

「俺の朝食はいらないよ。なんと言ったら分かるのさ」

私は毎日のように同じ言葉を口にして、家を後にする。

目覚めた後はいつもどおりだった。顔を洗い、歯を磨き、朝の二コースを見ながら学校の制服に着替える。ワイシャツのボタンをしめながらコップと牛乳を用意する。ネクタイをしめおわると牛乳を一杯のんで、昨日用意した学校指定のかばんを持って玄関へ向かう。途中で一度洗面所へよって、口をすすぐと玄関で革靴に足を通した。

私の母親は何度言っても私の朝食を用意する。
毎朝毎朝、食べられることのない皿に乗った食パンに私は同情する。

だが、生きていない食パンに向けられる同情は果たして意味があるのだろうか？

ところで、本当に食パンは生きていないのだろうか？

朝の早い通学路を、いつものようにひとりで歩く。歩きながら自問する。

自問することに意味などない。

ただ意味するところを自問するだけだ。

私は歩く。

暑くなりはじめた初夏の太陽は、私にじつにいい答えをくれそうなのに、焦らすかのように太陽は答えてくれない。

私は焦れる。

だけど、この問いに、他人から受け取った答えなどに意味はない。ただ意味がないからこそ、たまに私は、そこに無性に無意味を感じとる。

ただそれだけの道理。

義理もなければ引つ込むこともない道理。

ちらほらと私以外の生徒たちが見られるようになって来る。

そのうちの一人に私は見知った顔を見つける。

私はあいさつをする。

「おはよう」

学校に着くと私の机がなくなっていた。

私の机はこの教室に存在することを許されなかった。

許されなかった机に、私は同情する。

だが、机は生きていない。有機物ですらない。食パンですらない。だからきつと私の同情は筋違い。

けれどもそれは、机が生きていれば、筋違いではなくなるのだろうか？

そもそも私は、だれに許されてここにいるのだろうか？
ちよつとだけ困つてしまふ。

困つている私を見て、教室にいた数人がくすくすと笑つた。
その他の私以外の人たちはただ気まずそうにしている。

私は私に自問する。

私はどうしたらいいのだろうか。

珍しいことに答えはすぐに出た。

屋上にあるあまつている机を持ってこよう。

二階にある三年の教室まではちよつと遠いけど、それでも今の私はとてもきげんがいい。珍しく答えられた私はきげんがいい。とてもいい。

キチキチと頭のネジが軋きむ音がする。

それは絞しめすぎだ。それ以上絞められるとネジ穴がバカになるか、その前にネジが切れちゃうよ。

ネジつて結構頑丈だけど、それだつて限界があるんだよ。

一見硬くて壊れないように見えるけど、案外簡単に壊れちゃうんだよ？

キチキチ、キチキチ。

ところで私は自問する。

ネジつてところで生きてるのかな？

キチキチ巻くと、それはまるで悲鳴のよう。

軋しんだ音は私の頭一杯に響き渡る。

キチキチ音の鳴る様に、

私は薇ベシ仕掛シカケけに自分の机を用意する。

気づけばもうすぐ放課後だ。

私は一日中、ボーっとしながら授業を受けていた。

ノートはきれいに取つてるし、内容もしっかり頭に入っている。

家に帰ると、いつもすることがないので予習復習を欠かしたことはここ二一年間に、一度もない。だって、私にはそれしか時間をつぶすべがないから。

気がつけばキチキチとあの可哀想な音はしなくなっていた。ネジはもう哀しくなくなったのだろうか？

そうであれば、私としてはとてもうれしい。

大学受験は近いが、私はそこに意味を見出すことができない。いまさら私は自問する。

そういえば、意味ってなんだろう。

それって生きていく上で必要なものなのだろうか？

ところで私は生きているのだろうか？

私をくすくす笑うあなたは、はたして生きているの？

放課後になった。

私は後ろの席を振り向く。

そこには朝あいさつをしたクラスメイト。えっと、名前なんだったか？

「なあ、お前ってさ。ちゃんと生きてるって実感を持ってるか？」

クラスメイトは私を見ようとしてもしない。

そのクラスメイトのそばに、別なクラスメイトがよってくる。

ふたりで話を始めた。

聞こえなかったのだろうか。私はもう一度、はっきりと言った。

「俺にはよく分からないんだ。お前は、さ。いったい何の為に生きている？」

帰り支度を進め、今まさに帰ろうとしていたクラスメイトはその一言でようやく私のことを見た。

よかった。

ちゃんと聞こえていたようだ。

「きも

ほそつと。つぶやくようにクラスメイトは魔法の言葉をつぶやいた。

それだけ言うと、ふたりは再び話し始め、やがて教室から消えていった。

私の頭には、再びネジの絞められる音が啼き響いていた。

家に着くと、とりあえず今日の復習をしておいた。

男子高校生としては比較的整頓された勉強机に向かった。

学校のとほ違つ、木目調がやけに目に付いた。

やがて夕食の時間になつた。

食事時に会話はなひ。

ただ沈黙を守り、いそぐわけでもなくゆつくりと夕食を咀嚼する。

そのあとはまたやるこゝろがなくなつて机に向かう。

気がつくと時計の針は11時を指していた。

寝る時間だ。

私は機械的に自室へ入り、布団をかぶる。

目をとじて、ただよう暗黒の中で自問する。

繰り返す毎日。変わり映えのしない日常。

私は自らが生きているのかを自問する。

「当然だ！ 俺は今、ここで息をして、ものを考え、確かに生きて
いる……………っ！！」

……
本当に？

END.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6157c/>

私は語るべきを持たない

2010年10月8日15時43分発行